



時代とともに生きる神仏

陸 奥国磐城榎葉八幡神社は五里八幡とも称し、古くは榎葉山・榎葉岳とも呼ばれた五社山（685メートル）に榎葉八幡宮として鎮座していたと伝えられています。康平年間に源頼義が勅を奉じ、奥州の安倍貞任・宗任征伐の時、通行する街道筋に鎌倉の鶴岡八幡宮を起点として五里毎に石清水八幡宮を勧請し一社を建立し、戦勝を祈請したことによります。前九年の役（永承6年～康平5年）で鎮定を命じられた頼義と長子義家（八幡太郎）に康平5年（1062年）「榎葉山の五所（五神を祀る）の霊地に石清水八幡宮を勧請して、戦いの勝利を感謝し奉幣を納めよ」という石清水八幡のお告げがあり、康平6年（1063年）「石清水八幡宮」を由比鶴岡に勧請し、治承4年（1180年）源頼朝が現在地に移したものとされています。五社山に勧請した石清水八幡宮のことを御社といい、その社の境内は、勝利が叶ったことに因んで叶沢と呼ばれるようになり、五神を祀って義家が神酒を醸造した跡を酒造庭と呼ぶようになったということです。五社山は八幡の他熊野、白山、羽黒、稲荷社を合祀したことよっての名称とされています。天文21年（1552年）の磐城領主岩城重隆、明暦3年（1657年）の磐城平藩主内藤忠興などが祈願所として社領寄進や社殿修復を行ったとされています。明治6年に郷社となり、昭和40年拝殿が新築され、昭和43年に第二の大鳥居が建設され、春4月19日には桜花の咲き誇るなかで「花祭り」が行われ、神輿の渡御祭や流鏝馬を見学する参拝者で賑わいます。



寛 文年間になると、磐城平藩主内藤忠興の命により、この地七曲（鶴ヶ崎）新田が開墾され、榎葉八幡神社の神官猪狩宗満が、農神である太田農神社を勧請したと伝えられています。明治10年に本殿の外壁欄間には、春から秋にかけての農耕に関する素晴らしい彫刻が彫られ、現在は、町指定文化財になり大切に保護されています。

松 原山秀臨院林蔵寺は、明治時代以前は浄土宗名越派に属し、本寺はいわき市平山崎の専称寺でした。縁起によると、創建は文明5年（1473年）、岩城氏の臣である高倉城主猪狩筑後守隆清が、下野国の浄土宗名越派檀林円通寺第三世良徳上人の弟子適蓮社良調上人に帰依し、浅見川の地（上浅見川字寺所）に一字を建て、林蔵寺と号したということです。しかし、慶長年間に岩城氏が国替えになり、寺は檀那である猪狩氏とともに零落しますが、寛文11年（1671年）中興上人といわれる第十一世行蓮社良縁寿の上人の時に、堂宇を上北迫の現在地に建立し松原山秀臨院と称しました。文化9年（1812年）野火のため焼失しますが、弘化3年（1846年）本堂を再建し、安政3年（1856年）に庫裡が再建され現在にいたっています。本尊仏の阿弥陀如来は運慶作と伝えられ、寺仏となっている二十五菩薩像とともに町指定重要文化財となっています。



阿弥陀如来像



二十五菩薩像

八 雲神社の浜下り神事は旧6月15日が本祭り。本殿での神事後ご神体を神輿に移し、猿田彦（青年団員で三方部持ち廻り）を先頭に社総代は幣束、世話人は榊を奉持し、青年団は神輿を担ぎ、太鼓、花を持って行列を組み、海岸に向います。以前は海岸に着くと、直ちに神輿は海に入り潮垢離をとりましたが、現在海岸線が侵食され直接海に入ることが困難なため、一旦祭場に神輿を安置し、青年団員が汲んだ潮水を神官、世話人が榊に浸して神輿に振りかけます。榊は神輿の前に挿し、神官による修祓、祝詞奏上など一連の神事が行われ、終ると赤飯（おごふ）と御神酒を全員に配って休憩をとり、三本の花は「花を散らす」と言ってお互いに取り合い家に持ち帰って神棚に飾ります。この神輿の渡御は荒々しくもまないと疫病病虫害が流行するといわれています。